

平成30年度農林水産技術会議開催結果

水産技術センター

開催日	平成31年2月14日	開催場所	水産技術センター内水面試験場会議室
部会名	研究課題設定部会		
評価課題	在来ヤマメ漁場環境再生事業		
評価委員	元東海大学海洋学部・非常勤講師 酒匂川漁業協同組合・代表理事組合長		
評価概要	<p>河川環境が悪化し内水面漁協の経営も厳しい状況にあり、環境面と産業面から重要な課題である。養殖魚でない半天然のヤマメを放流する新規性のある取組であり、産卵場造成の効果把握も含め科学的な根拠を求めて取り組むことで重要性や創造性が高くなる。技術の早期開発と成果の積極的な公表を期待する。</p> <p>調査への協力等を通して在来ヤマメに対する知識を深め、本課題の成果が漁協のためになることを理事が理解し、組合員にも波及していくよう工夫したい。また、漁協では溪流魚の種苗生産を行っており、本課題はその必要性について理解を深める契機となる。将来的に本課題の成果を現場で活かし、溪流魚の部門が経営的に安定することを期待する。</p>		

開催日	平成30年11月15日	開催場所	水産技術センター相模湾試験場
部会名	研究成果評価部会		
評価課題	漁場環境保全調査		
評価委員	北里大学海洋生命科学部・教授 神奈川県漁業士会・会長		
評価概要	<p>モニタリング調査は、公的な試験研究機関でないと長期的に実施できないものであり、県の機関が取り組むべき課題として妥当である。調査の結果、これまで把握されていなかった基礎的なデータを把握できた点が評価できる。今後の展開として、種苗放流の適地の選定及び放流方法の改良へ還元できる可能性や、ゴカイが新たな指標生物になる可能性があり、データの活用が期待される。</p> <p>本課題は、漁業者として実施を望むものである。河口域に餌となるアミが多いという試験場の調査結果から、河口域でヒラメの放流を行っており、河口域の変化を捉えて行けば栽培漁業や海岸保全に応用出来るのではないかと思う。調査の結果は、水産分野に止まらず、今後の地球環境と関連していく可能性があるため調査を継続してもらいたい。</p>		